

フラウ・ヨッホ(欧州駅最高位)に到着する。駅の周囲の岩壁は素掘のまま、鉦山の坑内見張同様の観があるが、暗の中に駅名を記した電光板(3.554m)が示されている。駅から坑道が分岐し、東向の坑口のテラスからは、遙に聳立する4.000m級のフィーセル・ホルン及びフィンステル・ホルン等の山々やアレッチ氷河を眺めることができ、他の坑口のテラスからは、ユングフラウ(4.158m)の背を越えてその頂上を見上げることができ、共に展望が雄大である。また氷河を貫いた「氷の宮殿」の室には氷の彫刻が刻まれているが、氷床の氷が融けて、足もとが極めて不安定である。

正午過ヨッホ駅に暇を告げて、クライネ・シャイデックに降り、ホテルで昼食をとり休息する。再びウェンゲル・アルプ鉄道の電車により、グリンデルワルトに帰着の上、これよりベルナー・オーバランド鉄道経営の電車に乗換え、インターラケンに降りた。当地は湖に結ばれた盆地の別荘地で、特有の工芸品を売る店が多い。

これよりバスに乗換え、再びブリエンツ湖の辺を東進、ブルニヒ峠を越え北上し、緑の森林帯を進み、ルツェルン市に入り投宿した。

## リーダー養成のための附属学校を

朝倉隆太郎

東京教育大学とお茶の水女子大学は、それぞれ東京高等師範学校と東京女子高等師範学校とを前身とし、大塚の地で寄り添って歩み続けてきた。高師・女高師の目的は中等教員の養成にあったので、ともに附属中学校(旧制)及び附属高等女学校を併設していた。それは現在附属高等学校・中学校になっている。私は昭和22年から31年までの9年間、東京教育大附属高校に社会科教師として勤務していたのであるが、その卒業生の海外における活躍状況から、国立大学附属学校が果たしてきた役割の一端を考えてみたいと思う。

東京教育大附属高校の卒業生名簿(昭和52年8月末現在調べ)によって、海外在住者数を数えると、247名である。

年令別にみると、85才以上1、80~84才1、70~74才1、65~69才1、60~64才4、55~59才5、50~54才12、45~49才13、40~44才52、35~39才67、30~34才54、25~29才27、19~24才9となり、35~39才の働き盛りの年令層を極大値とした美しいカーブを描く。極大値の前後の階層を合わせた30~44才の計は174名で全体の70%を占める。

地域別にその分布をみると、北アメリカ121、中南アメリカ16、ヨーロッパ77、アフリカ6、アジア22、オセアニア5で、全世界に及ぶ。国別では合衆国の103名を第1位とし、西ドイツ(23)、フランス(19)、カナダ(18)、イギリス(13)と続き、ニューヨークには27名ワシントンDCには6人がおり、それぞれ附属会を開催していると聞く。昭和49年に文部省在外研究員として合衆国とイギリスに出かけたとき、旅先で附属で担任した生徒に出合い、その活躍の様子を心強く見聞した。航空会社に勤めるF君は数百億円単位の航空機の購入に折衝の苦心を話してくれ

た。商社マンの妻となったMさんは子供をハーバード大学に入学させ明るい家庭をつくっていた。

職業別にみると、大手商社員、外交官、学者、銀行員などが多く、海外における日本の頭脳としての重要な役割を果たしている。

附属高卒業生は、内に貯えた実力を外にひけらかすことがなく、おおらかに生きている。自己には厳しいが他人には寛容である。

附属学校の入学試験制度が新聞紙上で大きく取り上げられ、抽せん制の導入が強調されている。文部省もまたそれを要望しているようである。一般論としては、私もそれに決して反対するものではない。しかし、その結果、国家の柱石となるべきリーダー養成を国立の附属学校のすべてが放棄することになるのを恐れる。学習指導要領の総則にも述べてあるように「生徒の能力・適性等の的確な把握に努め、その伸長を図るように指導する」ことが必要である。したがって、知能指数の低い生徒のためには、国立の附属養護学校が設置され、少数の生徒のために莫大な予算が投入されている。それは誠に喜ばしいことである。しかし、それと同時に、知能指数の極めて高い生徒についても特別の配慮をすることがなければ、公平の原則に反するように思う。国立の附属学校の中に、能力の高い生徒のための附属養護学校又は養護学級がいくつかはあってもよいのではなからうか。

リーダー養成を忘れれば、国家は衰退するものである。

## 計画するということ

井手久登

英語のPlanおよびPlanningの両方とも日本語では計画と訳される。計画された結果も計画策定段階の行為も日本語では同じだから大変に厄介なことになる。Planは限られた情報を基にPlanningされた結果であり、Planに現実的不都合が生じたならPlanning Processから考え直さねばならない筈である。しかし現状では、一度できあがってしまった多くの公的計画はそのプロセスがいかに関係あろうとも、一般の人々に対しては絶対的権威をもって君臨しようとする。それに対して本来国の大方針であらねばならぬ諸計画は案外と簡単に短時間で変わってしまう。これは全く困ることなのであるが、前者の計画はPlanとして、後者の計画はPlanning Processの中での恣意的願望（たとえ科学的必然性はなくとも、そうしたいという意図）を恰も必然的結果としてのPlanのように示しているからであろう。

いずれにしても、ここで表わされているPlanは双方ともPlanning Processを明示しない点では共通している。これはPlanningという行為が何か神秘的な特殊能力の持主によるブラック・ボックスの仕事のように思われていることをうまく利用しているからである。

Planningとは本来いくつかの有効な情報を基礎にして（全ての情報を集めることは不可能であるから、その中で最も効果的な指標性の高い情報を抽出して）将来の在り得べき姿を論理的に設定する作業といえることができる。その結果与えられるPlanはいくつかの可能性の中の一つであり、一定不変のものでもなく、それまでの成果の一応の集大成である。情報に変化が生ずれば当然Planと